

第九章 総括

第一節 岐阜まつりと岐阜県内の祭りの比較

「岐阜まつり」は、二〇一九年三月二十八日に岐阜市重要無形民俗文化財に指定された。指定名称は「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」であり、伊奈波神社の一連の例祭神事と、四月第一土曜日・日曜日に行われる岐阜祭りの中の伊奈波神社に係る行事群（神幸祭、宵宮、山車奉曳とからくり奉芸、神輿奉納など）から構成されている。ここでは、「岐阜まつり」と岐阜県内の祭り・行事とを、神事・祭事の関連性、山車の形態、からくり奉芸、そして後継者育成や山車の保存・修理などの観点から比較し、改めて「岐阜まつり」の魅力について記載する。

（一）神事と行事との関連性の比較

『岐阜県の祭り・行事』（岐阜県の祭り・行事総合調査報告書 二〇二〇年三月 岐阜県）によれば、岐阜県内の指定無形民俗文化財は、国指定重要無形民俗文化財十三件（寒水の掛踊^{かのみず}）含む、県指定重要無形民俗文化財五十九件、市町村指定重要無形民俗文化財一七〇件となっている。また国指定重要無形民俗文化財のうち、「高山祭の屋台行事」（高山市）、「古川祭の起し太鼓・屋台行事」（飛騨市）、「大垣祭の軸行事^{やま}」（大垣市）は二〇一六年に「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録され、さらに二〇二二年には郡上市の「郡上踊」と「寒水の掛踊」が「風流踊」としてユネスコ無形文化遺産に登録された。この二四〇件にも及ぶ指定無形民俗文化財のうち、「伊奈波神社祭礼に伴う岐阜まつり行事」のように、指定名称に「行事」が付いている県内の指定文化

財として、ユネスコの「山・鉾・屋台行事」に登録された三件のほかには、県指定では、「長屋神社の祭礼行事」（本巣市）、「岩村町秋祭行事」（恵那市）を、市町村指定では、「伊勢神楽（神賑行事^{かみにしぎわい}）」（高山市）、「三夜待ち行事」（飛騨市）、「中呂数珠くり行事」（下呂市）を挙げることができ、「岐阜まつり」を含めるとわずか十件という数になる。

「岐阜まつり」の場合、「行事」という言葉が使われているのは、伊奈波神社の例祭の日に、神社本体の「神事」のほかに、いわゆる「町衆」たちが行う、山車奉曳、からくり、神輿などのさまざまな行事が生まれ、「町衆」たちに重きを置いた祭事が祭りの中心にあることからきている。ユネスコ無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」の提案要旨にも「地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う、各地域の文化の粋をこらした華やかな飾り付けを特徴とする『山・鉾・屋台』の巡行を中心とした祭礼行事」とあり、祭礼行事の主役はあくまでも地域住民であり、都市が成熟する中でその地域に住む人々が育てた無形の文化遺産であることが強調されている。

この提案要旨について無形文化遺産の一つである「高山祭の屋台行事」を例にとつて具体的に見てみる。「高山祭」の春の山王祭は日枝神社の例祭、秋の八幡祭は櫻山八幡宮の例祭であり、それぞれ町々から繰り出された屋台が曳行される。春の山王祭の試案祭では、日枝神社の神事を合図に祭りが始まり、二日間にはわたり総勢数百名の祭行列（御巡幸）が日枝神社と御旅所間を練り歩き、闘鶏^{とうけい}楽や獅子舞なども行列に華を添える。また十二台の屋台が所定の場所に曳き揃えられ、そのうちの三台によりからくり奉芸が披露され、夜には屋台に提灯が灯され曳き廻しが行われる。本祭にも再び屋台の曳行があり、神輿還御^{かみぎよ}とともに屋台の曳き別れ、そして日枝神社の神事で幕を閉じる。このように「高山祭」は、例祭の中で行われる「神事」と地域の人々が執り行う屋台や神輿の御巡幸、それに伴う芸能などの「行事」が一体化している点に文化財としての



非常に高い価値を見ることが出来る。

「岐阜まつり」においても、地域の人々の伊奈波神社への信仰心というものが祭りの中心にあり、四月五日に行われる伊奈波神社の例祭と一体化している。初日の四月第一土曜日に行われる神幸祭では、伊奈波神社の主祭神である「五十瓊敷入彦命」が金神社、樫森神社を神輿に乗って渡御する。金神社の祭神が五十瓊敷入彦命の妃である淳熈斗姫命であり、樫森神社の祭神が子の市牟雄命であるため、三社は古来より緊密な繋がりをもってきた。「岐阜まつり」の神幸祭においても、発肇祭後、伊奈波神社を出発した神輿は金神社に到着し、御旅所祭が行われる。そして樫森神社へ神輿が渡御する途中、三社の神幸行列が合流して街中を練り歩き、三社合同祭典となる。その後、樫森神社でも同様の御旅所祭が行われた後、神輿は伊奈波神社に戻り還幸祭で幕を閉じる。当日は「道三まつり」の神輿パレードもあり、市内は活気に満ちているが、それとは一線を引き、厳粛な形で神幸行列や三社合同祭典が実施される。一方、各地域から神輿や山車が地域を練り歩き、伊奈波神社へと向かう。そして山車からくりが奉納される宵宮となる。二日目の日曜日は午前中に山車を地域で練り廻し、その後「やまおろし」となる。このうち宵宮では山車清祓において、山車が一台ずつ順に伊奈波神社前に移動し、神宮の祓詞奏上、大麻祓い、玉串奉納が行われ、次いで神輿清祓、玉串奉納の後、山車の上でからくり奉納が行われる。宵宮は伊奈波神社の祭礼の中で「町衆」



写真 9-1 「岐阜まつり」神幸行列

たちが行う行事として重要な役割を担っているのである。

「岐阜まつり」や「高山祭の屋台行事」のように神輿や山車・屋台を中心とした渡御祭は県内には数多く残されている。無形文化遺産に登録された飛騨市の「古川祭の起し太鼓・屋台行事」は気多若宮神社の例祭で、神輿行列が中心となり、動の「起し太鼓」と静の「屋台行列」がこれに加わる。同じく無形文化遺産に登録された「大垣祭の軸行事」は大垣八幡神社の例祭で、軸奉芸（神前）、掛芸（その他の場所）、軸曳き廻し、夜宮へと続く。掛芸郡掛芸川町の三輪神社の例祭である「掛芸まつり」では、神輿渡御とともに曳軸の上で演じられる子ども歌舞伎が有名であるが、神輿を担ぐ時や軸を曳く時に「おぼばの唄」を声高らかに歌うところに特徴がある。関市の春日神社、神明神社および貴船神社の例祭である「関まつり」では、山車の曳行とともに「神事」と芸能を一体化とした「どうじやこう」が演じられる。美濃市の八幡神社の例祭である「美



写真 9-2 掛芸まつり 神輿を掲げ「おぼばの唄」を歌う



写真 9-3 岩村町秋祭行事 神輿渡御行列

濃まつり」では美濃和紙で飾り付けをした花みこしや山車がうだつの上がる町並みを練り歩く。また試楽祭の夕方には笑いを誘う即興劇「美濃流しにわか」(国選沢)が披露される。この祭りでは八幡神社の「神事」を地方(農村部)が、山車や練り物の巡幸などの「行事」を町方が担当するという役割分担がなされている点に特徴がある。

「行事」という名称が付く「長屋神社の祭礼行事」では、試楽祭には境内修祓祭人馬係の宮参り、山車神楽の奉納が行われる。本楽祭では、昼食時に「二本茶漬け」を食し、境内では神輿の渡御、山車の上では稚児の舞及び獅子の舞が行われ、最後に馬掛神事となる。また「岩村町秋祭り行事」は、神輿渡御・還御行列とその途中及び神社で奏する打囃子・雅楽や獅子芝居などからなる。二日間武並神社と八幡神社の間を往復する総勢三〇〇人の神輿御渡行列は荘厳である。

(二) 山車の形態の比較

以上のように見ていくと渡御祭にはその中心となる見所が数多く用意されているが、「岐阜まつり」の場合はなんと言っても山車からくりである。

次にその山車について見てみる。『岐阜県の祭り屋台』(水野耕嗣監修 岐阜新聞社 二〇〇三年十月四日発行)によれば、県内に現存する山車の総数は曳き出されていないものも含めれば、およそ六十五カ所一五〇台あるとされる。「岐阜まつり」では現在、「踊車」、「安宅車」、「若戎車(蛭子車)」、「清影車」の四台が曳行される。「踊車」は四輪内輪、二階部が高欄付きの舞台形式となっている。からくりが奉納される他の三台はいずれも名古屋型であり、四輪外輪で輪覆があり、前方に前棚、後方の人形飾り台に四本の細い柱が立ち、曲線状の唐破風屋根を支えている。一般に名古屋型の「山車」はからくり人形を重視するが、同様の山車は「加納天満宮例祭」(岐阜市)、「久々利八幡神社大祭」(可

児市)、「高田祭」(養老町)、「関まつり」、「美濃まつり」などにも見られる。美濃地域には尾張藩領であったところが点在し、名古屋の祭礼から直接的な影響を受けていると考えられる。「大垣祭」(大垣市)、「綾野祭」(大垣市)、「竹鼻まつり」(羽島市)の山車は車輪を台車の内側に設けた内輪式であるが名古屋型の一つと見ることが出来る(水野二〇〇三)。

一方、歌舞伎などを主体とする長浜型芸能舞台形式の「曳山」は「垂井祭」(垂井町)、「揖斐まつり」、「室原祭」(養老町)、「大垣祭」、「笠松春まつり」(笠松町)などに見られる。「大垣祭」の軸は、名古屋型変形「山車」と長浜型変形「曳山」が混在する独自の存在となっており、東西の祭礼文化の交渉がうかがえる点で非常に価値が高い。また西濃地域では「軸」という独特の字が使われる点も特色である。近隣の羽島市の「竹鼻まつり」の山車も「大垣祭」の軸同様、からくり人形付き名古屋型と子どもの手踊りなどが演じられる舞台芸能型が混在している。



写真 9-4 垂井祭 曳軸における子ども歌舞伎



写真 9-5 置山における南宮大社蛇山神事



露される代表的な祭りは次の図1のとおりである。その中でも、「岐阜まつり」の山車や写真6の養老町「高田祭」の「林和靖軸」に代表されるように、山車の四



写真 9-6 「林和靖」の幣振り人形

(三) からくり奉納の比較

このように地域によって山車の型や名称は異なるが、県内には山車に載せた「からくり」を披露する祭りが数多く見られる。人形を糸で操る糸からくりが中心であるが、中には棒から棒へ飛び移るといった離れからくりや操り師と人形を結ぶ糸が一旦切られている糸切りからくりも見られる。山車からくりが披露される代表的な祭りは次の図1のとおりである。その中でも、「岐阜まつり」の山車や写真6の養老町「高田祭」の「林和靖軸」に代表されるように、山車の四

「高山祭」や「古川祭」の山車は「屋台」と呼ばれ、江戸型の山車を祖形とし、上方の装飾やからくり人形を取り入れたもので、東西文化の融合の結晶といえる。高山の屋台は方向転換する際に用いる戻し車など独自の特徴がある。

「だんじり」と呼ばれる山車が曳行する祭りには「太部古天神社祭礼」（川辺町）、「久田見まつり」（八百津町）、「八百津まつり」（八百津町）、「諏訪神社祭礼」（美濃加茂市）など、可茂地区の祭りに多くみられる。その他、大山と呼ばれる巨大な置山と鞆鼓稚児舞が演じられる曳山が一体となって奉納される事例として、「南宮大社蛇山神事」（垂井町）、「大矢田ひんこ祭り」（美濃市）、「御嵩薬師祭礼」（御嵩町）を挙げることができる。

本柱内に主役となるからくり人形、前棚に御幣や采配などを持つ幣振り人形や采振り人形を乗せた型のものが多い。また、からくり奉芸の際に能楽の謡曲が演奏されることが多いことも県内の特徴であり、いかに中世の芸能が近世に影響を与えたかを知るための貴重な資料となっている。

「岐阜まつり」の安宅車では前棚に幣振り人形、上棚には弁慶人形と大将人形として義経人形を飾り、謡曲『安宅』に合わせ、義経一行が安宅の関で関守の富樫某に止められるが、弁慶が偽りの勅進帳を読んでその場を逃れる場面を演じる。若戎車（蛭子車）では前棚に唐子人形（采振り人形）、上棚の上・前方にからくり仕掛けの宝船、その後ろに若恵比須人形を乗せる。奉納では、初めに鼓、太鼓、大太鼓や能管（横笛）による生演奏があり、その後、からくり奉芸となるが、えびす様が鯛を釣り、福をもたらす宝船が現れる場面を謡曲『宝船』に合わせて演じる。清影車では前棚に幣振り人形、上棚に豊玉姫人形と大将人形として彦火々出見尊人形を飾る。からくり奉芸では日本書紀の中に見られる海幸・山幸の神話から創作された能『玉井』という演目の一節が上演される。豊玉姫が龍神に、そして再び豊玉姫に戻るという「変身からくり」である。

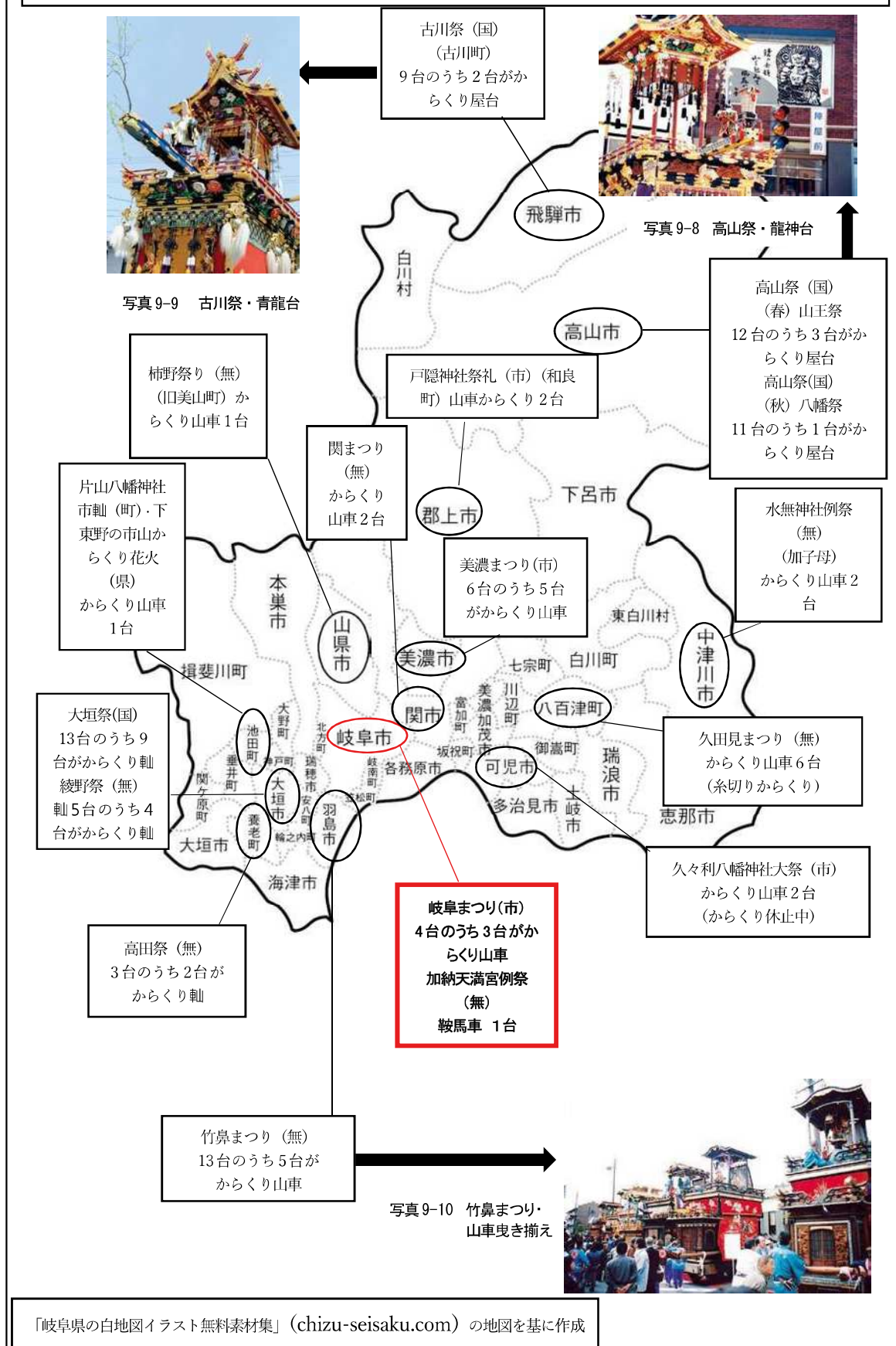
同じ名古屋型の

「関まつり」の「加茂山車」「浦島山車」でも、前棚には魔振り人形、上山にはからくり人形が設けられている。そのうち「浦島山車」では、市街地巡行中の要所



写真 9-7 関まつり・浦島山車

図 9-1 「岐阜県の代表的な山車からくり奉納がある祭り一覧」 () は指定の有無





にて、からくりの釣り竿を担ぐ浦島と魔振りの唐子の演技が披露される。唐子が糸の端に作り物の鯛を付けたところで浦島が釣り上げるといふ仕組みで、ここで謡曲『浦島』の謡が始まる。

「軸」と呼ばれる「大垣祭」の山車は、十三台のうち九台にからくり人形を載せている。本町「相生軸」は、謡曲『高砂』の楽曲に併せて人形が舞い、舞いを重ねるうちに瞬時に帆掛船に変身するからくり、岐阜町「愛宕軸」は、武内宿禰が舞っている中、現れた狂言師の手にした箱から二羽の鳩が出てきて、豆を拾うからくり、新町「菅原軸」は、額の白紙に、菅原道真の少年時代を模したという童子人形が手にした毛筆で一氣に文字を書き上げるといふからくりなど、大変ユニークでバラエティに富んだからくり奉芸が披露される。

「高山祭」や「古川祭」のからくりも見応えがあるが、高山祭の場合、春の十二台のうち、からくり奉



写真 9-12 久田見まつり・糸切りからくり



写真 9-11 大垣祭・菅原軸のからくり奉芸

（四）保存・伝承・活用のために

以上、「岐阜まつり」と県内の祭りと比較しながら見てきたが、どの祭りにも共通する課題がある。その一つが後継者不足や若者の祭り離れという問題である。各保存会は担い手不足から後世への着実な継承に不安を抱えており、後継者を育成するためのさまざまな対策を練っている。「岐阜まつり」の場合、地元の町内会や子ども会によって祭りは維持され、からくり人形の遣い方や囃子の演奏など、早い段階から準備に取りかかっている。特に山車の曳行時に奏される「道行囃子」と

納があるのは三台、秋の十一台のうち、からくり奉納があるのは一台だけである。春の三番叟のからくりは童子が翁に、石橋台のからくりは濃艶な美女が獅子にそれぞれ変身する「変身からくり」である。春の龍神台のからくりは謡曲『竹生島』に合わせて唐子が壺を持ち、その壺から龍神が飛び出すくみである。秋の布袋台のからくりは、男女の唐子が順番に綾（フランソワ）に飛びつき、回転しながら布袋和尚の肩と手に乗るといふ「離れからくり」であり全国的にも名高い。また「久田見まつり」のからくりには特徴がある。「久田見まつり」のだんじりは、二輪の花山車であるため、からくり人形の仕掛けも特殊で、操り師と人形を結ぶ糸が歯車によって一旦切られているところから「糸切りからくり」（久田見の糸きりからくり）国選択」と呼ばれている。



写真 9-13 岐阜まつりに向けた練習・明徳地区



写真 9-14 岐阜まつりに向けた練習・金華地区



写真 9-15 岐阜まつりに向けた練習・京町地区

人形からくり奉芸時に奏される「人形囃子」の演奏の担い手として子どもたちの存在が欠かせないため、どの地区でも子どもたちへの伝承に力を入れている。

明郷校区の岐阜若戎車奉曳会では、一月から週一回のペースで練習し、岐阜まつり本番までには合計二〇回ほどの練習を行う。子どもは縮太鼓、大太鼓と大人の能管による囃子からくり人形の動作を合わせる練習が三月末に数回行われる。演奏は平成二十七年からは全て生演奏となった。また「岐阜若戎車奉曳資料集」という山車囃子や衣装に関する冊子が二冊作成されているが、囃子を保存・伝承をしていく上で大変貴重な資料となっている。

金華地区の安宅車奉曳実行委員会では、一月から、大太鼓・能管と縮太鼓・鼓に分かれて計画的に練習を行っている。三月に入ると囃子全体の合同練習を週三回のペースで実施し、三月後半には、からくり人形の動作を合わせる全体

練習が始まる。全て生演奏で行っているが、囃子の指導者が自ら手本を示しながら子どもたちに懇切丁寧に教えている。

京町地区の清影車からくり保存会でも、三月から週二回、小学生の低学年と高学年に分かれて囃子練習を始める。初めと終わりの挨拶は小学生のリーダーが行うなど、子どもたちの自主性を重んじている。練習では三列に並び、テープ音源に合わせて、長板を太鼓に見たてて打つ練習から始まり、途中から縮太鼓を用意して順番に打つ練習となる。指導者は、子どもと同じ目線に立ち、邦楽特有の「間合い」を意識させながら教えている。

近年、都市化の進展や個人主義的傾向から地域社会における住民同士のつながりが希薄化し、地域で子どもを育てるという意識が低下しているといわれる。「岐阜まつり」の担い手となる子どもたちは、地域の古きから祭りにおける囃子の演奏技法をひたすら学び取るとともに、年長者に対する敬意方や地域社会の中での生き方を学んでいる。このように祭りの練習は、「地域の教育力」を十分に活かすことができる場でもあり、心身の鍛錬とともに、家庭内のしつけや学校教育だけでは学ぶことができない仲間の特長を生かし合って共に生きていくことの大切さを教えてくれている。

「岐阜まつり」以外の県内の祭り保存会でも、小中学校との連携によって後継者育成を図っている団体が数多く見られる。高山屋台保存会や大垣祭保存会では、若い世代への継承を図るため、小中学校での出前授業を行うなど学校と連携した活動に取り組んでいる。真桑文楽保存会も、中学生の真桑文楽同好会の指導を行ったり、小学生に対する体験教室を開催したりしている。一方、郡上おどり保存会のように小中学生を対象とするジュニアクラブを結成している団体もみられるが、どの保存会も後継者育成に余念がない。

二つ目に祭りで使用される山車、用具や山車を格納する収蔵庫の補修・修理が十分に行われていないという問題がある。「岐阜まつり」の場合、山車の所



有は「町方」であつたが、保管する場所がなく伊奈波神社に「寄附」することとなつた。現在は、伊奈波神社が祭りの期間だけ「町方」に「貸し出す」ことにしているが、山車やからくり人形の保存・修理という点で課題が残る。

こうした後継者育成や保存・修理の課題については岐阜県が策定した『岐阜県文化財保存活用大綱』の中にその解決策が示されている。そこでは、県が目指す文化財の保存・活用の基本方針を「文化財を知り、守り、育て、地域の資源として「清流の国ぎふ」づくりに活かす」とし、このうち「守り・育てる」では、「担い手を育成するための伝承教室、育成研修会、将来を担う子どもたちの育成教室に加え、大会や公演の開催に要する経費の一部を支援する」とあり、「活かす」では、「学校教育、社会教育の連携とともに、郷土への愛着・誇りの醸成、人材育成等を継承発展させる事業に対して補助を行う」とある。後継者育成のために、こうした県の補助金を有効活用していく方法がある。また大綱には「祭り行事の屋台、軸等の修理への支援を行うことにより、県民が今後も主体的に保存・活用に関わる土壌づくりを進める」とあるが、用具や収蔵庫の補修・修理に関しては、国や県指定の文化財に限られているため、「岐阜まつり」のような市町村指定の文化財の補修・修理については、限られた市町村の財政の中で行わなければならない。そのため、文化財保護を目的とする公益財団法人の支援事業に応募するという方法もあるが、いずれにせよ保存会と行政が連携を取りながら進めていく必要がある。

先のユネスコ無形文化遺産の提案要旨に「祭礼に当たり披露される芸能や口承に向けて、地域の人々は年間を通じて準備や練習に取り組んでおり、『山・鉦・屋台行事』は、各地域において世代を超えて多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしている」とあるが、地域に残る祭りは地域コミュニティの活性化に大きな役割を果たしている。「岐阜まつり」も「氏神・伊奈波さん」への信仰心とそれを支える地域コミュニティ

の中で生まれたものであり、岐阜という中規模都市にある大規模神社の伝統神事や行事を、神社を取り巻く人々の文化の中で考えていく上で貴重な文化財といえる。本調査報告書が、「知り・守り・育て・活かす」という四つの観点から、「岐阜まつり」を保存・伝承・活用していくための大きな指針となることを期待する。

（参考資料）

- 岐阜県『岐阜県の祭り・行事』岐阜県の祭り・行事総合調査報告書
- 水野耕嗣監修『岐阜県の祭り屋台』岐阜新聞社 二〇〇三年十月四日
- 植木行宣監修『山・鉦・屋台の祭り研究辞典』思文閣出版
- 清水昭男『岐阜県の祭りからⅢ』一つ集文庫
- 岐阜県『岐阜県文化財保存活用大綱』二〇二二年三月
<http://www.pref.gifu.lg.jp/page/139021.html>
- 岐阜県教育委員会編『岐阜県文化財図録』
- 無形民俗文化財「岐阜県公式ホームページ」（文化伝承課）（gifu.lg.jp）
- 外務省報道（別紙Ⅰ）「山・鉦・屋台行事」の提案内容（mofa.go.jp）
- 『祭礼行事・岐阜県』桜楓社 一九九二年三月十日
- 『祭礼事典・岐阜県』桜楓社 一九九三年一月十日

第二節 全国の都市祭礼と岐阜まつり

当調査が対象とした岐阜まつりとは、本書冒頭で「伊奈波神社の祭礼日に合わせて、伊奈波神社でおこなわれる神事のみならず、神事に関係ないことまで含めた賑わい」「十頁」と選定したものである。この伊奈波神社は延喜式内社で、美濃国三宮（一宮…不破郡垂井町南宮大社、二宮…不破郡垂井町伊富岐神

社」と称される古社であり、その由緒は第二章第二節に詳しい。毎年正月三日には多くの初詣客を迎え、令和七年には実に六十七万五千人を数えた（注1）。これは所在する岐阜市の総人口約三十九万九千人（令和七年一月一日「住民基本台帳」世帯人口）を大きく上回るものである。また、岐阜まつりについては、統計のある道三まつりだけでも令和六年は三十六万人の集客を得ている（「令和六年度岐阜市観光統計」）。このように、市内の氏子にとどまらず、広域からの尊崇を集め、多数の参加者や観客が集う岐阜まつりは、都市部での祭礼とすることができる。本節では先学による全国の都市祭礼に関わる研究を参照しつつ、岐阜まつりの意義について検討する。

（一）都市祭礼としての岐阜まつり

岐阜まつりは多様な行事が包摂されているが、なかでも宵宮の山車と神輿の練り込みと、道三まつりでの岐阜まつり神輿パレードが見どころとなっており、岐阜まつりは山車と神輿の祭りというイメージが一般には強い。毎年製作される宵宮、道三まつりのポスターの素材にも、山車と神輿を使うのが通例である。宵宮の主催は平成七年（一九九五）組織化された宵宮実行委員会「第三章第三節（二）参照」であり、伊奈波神社の神事の付け祭りが宵宮との位置づけから、自治会、神輿、神社、行政の各関係者が参加している。つまり、現在の宵宮は神社の神事ではなく、宵宮に関わる関係者による行事となっている。

都市祭礼において、このように神事と行事が重層的に存在する例は各地で見られる。国指定重要無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「秩父祭の屋台行事と神楽」として登録されている、埼玉県秩父市の秩父神社例大祭を調査した藺田稔は、『祭りの現象学』「平成二年 弘文堂」において、神社・町内会・観光協会の関係性から、祭りとは「劇的構成のもとに祭儀（リチュアル）と祝祭（フェスティビティ）とが相乗的に現出する非日常的な集団の融即状況（コ

ミュニタス）の位相において、集団の依拠する世界観が実在的に表象するものである。」「六十四頁」と指摘している。藺田の論に従えば、岐阜まつりにおける前夜祭、例祭、神幸祭（発輦・神幸・還幸）は「祭儀」となる。それに対して宵宮は、参道鳥居前の広場という、伊奈波神社との関連を明確に認識できる意味ある場所が会場であり、主催者が神社ではなくとも、伊奈波神社の祭礼の一部として広く認識されていることから「祝祭」に相当させることができる。このように、岐阜まつりは秩父神社例大祭と同じ表象の構造を持つものである。

一方、京都の夏の風物詩として名高い五山送り火の一つ、左大文字送り火の行事を都市祭礼として分析した和崎春日は、『左大文字の都市人類学』「昭和



写真 9-16 宵宮における神輿の総練り（令和6年4月6日）



写真 9-17 宵宮における神事（安宅車）（令和6年4月6日）



六二年「弘文堂」において、都市祭礼は三つの行事性、すなわち宗教行事・伝統行事・観光行事があり、それぞれの属性を自然性、閉鎖性、開放性とし、これらが併存することに特色があるとした。岐阜まつりにおいては、宗教行事として前夜祭、例祭、「よみや」での神事、神幸祭（登輦・神幸・還幸）、伝統行事として地域での山車の奉曳や神輿の巡行、観光行事として宵宮の山車曳揃えと神輿練り込み、道三まつり「第一章第四節参照」とすることができる。このように和崎の指摘する都市祭礼の重層性は、岐阜まつりとも合致する。

このように、現在の岐阜まつりは、宗教行事、伝統行事、観光行事が重層的に併存し、祭儀と祝祭が相乗的に現出している、都市祭礼の一つと捉えることが適当と思われる。

（二）宵宮の組織と岐阜まつりの開放性

前項で、宵宮について「よみや」での神事を宗教行事、宵宮での山車曳揃えと神輿練り込みを観光行事と分けて考えた。これは宵宮実行委員会結成以前、この夜祭りは伊奈波神社が「よみや」と呼び主催していたことに基づく。当時は町内の山車や神輿がぼつぼつと集まるものであったというが、賑わいを取り戻すべく結成された宵宮実行委員会によって、山車の曳き揃えと、総練り（巻頭写真3）をクライマックスとする神輿練り込みという形に整えられたことで、観光行事として今日の盛況を見ている。一方「よみや」の伝統は、宮入した山車が鳥居前で神職による修祓と奉曳の代表者による玉串奉献を行い（写真9・17）、神輿も練り込み後に代表者が修祓を受け玉串奉献を行う（巻頭写真3）という神事に残っている。

一方、観光行事の属性である開放性を示す例として、宵宮に練り込む神輿の団体として設立された岐阜神輿連があげられる「第三章第四節（五）参照」。同連は設立の趣旨を次のように宣言した。

私たちは、「岐阜神輿連」といいます。

私たちは、「神輿」を担ぐことの好きな人の集まりです。

私たちは、「神輿が好きな人」であれば、

「神輿」を持っても、いなくても、

男であっても、女であっても、

たとえそれが一人であっても、

「神輿」を担げるように、

「神輿」が大好きな仲間」づくりがしたい。

存分に活躍できる場を設けていきたいのです。

一人ひとりの個人の集まりが集団になり、

・・・町内ぐるみ、団体ぐるみ、会社ぐるみ・・・

一つでも多くの「神輿」をかつぎだしたい、

と考え、

ここに「岐阜神輿連」を設立いたしました。

「岐阜神輿連設立趣旨」

ここには町内を主体とした担ぎ手による伝統と閉鎖性に対し、神輿を担ぎたいという個人の価値観によって結集した集団を容認し、岐阜まつりに共に参加しようという、開放性が明確に示されている。

このように旧来の町内を単位とした地縁などによらない団体の祭礼への参加は、東京都千代田区の神田祭など、他の都市祭礼でもみられる。なかでも「小倉祇園祭の小倉祇園太鼓」が国指定重要無形民俗文化財に指定されている福岡県北九州市の都市祭礼、小倉祇園太鼓を分析した中野紀和は、『小倉祇園太鼓の都市人類学』（平成一九年 古今書院）において、「祭礼のなかで中心的役割を果たす組織が、町内から個人的な結びつきによる組織へと移行しつつある」「九十九頁」とし、企業や友人を母体とした有志チームなど、新たな価値観に

よる集団をボランティア・アソシエーションと定義した。そして伝統文化の維持は、従来の価値観と外部の視線をとりこんだ新たな価値観の相互関係のうえに成り立っていると指摘している。岐阜神輿連と岐阜まつりの関係も、この指摘と全く軌を一にするものである。

さらにこの傾向は、岐阜神輿連の参加団体であるとともに、伊奈波神社の氏子であり、江戸時代以来の歴史を誇る本造町の町神輿（本神輿）にもみられる「第六章第二節参照」。この神輿は、戦後まもなく担ぎ手不足で中断の後、昭和六十三年（一九八八）に復活したものの、近年は再び担ぎ手を町内とその関係者で手配することが困難となり、神輿会所に虫干しを兼ねて飾るのみであった。しかし、平成六年（一九九四）担ぎ手をQRコード等利用し一般募集すること、五年ぶりに宵宮の練り込みを行っている（注2）。閉鎖性の強い町内から、担ぎ手を公募により開放したことで、神輿を担いで町内を練り歩き、宵宮で宮人をして参拝するという信仰に基づく価値観から、純粋に神輿を担いで祭りを楽しみ、盛り上げようという価値観を取り入れることで、練り込みが実現したといえる。

（三）岐阜まつりと道三まつりの関係性

一方、道三まつりについては、JR岐阜駅北口駅前広場、金公園、柳ヶ瀬、神田町など岐阜市中心市街地一帯で開催されている「令和七年度」。正式な名称は「岐阜まつり協賛 道三まつり」であり、メイン行事の「岐阜まつり神輿パレード」のほか、斎藤家の菩提寺である岐阜市梶川町常在寺における「斎藤道三公追悼式」、駅前における「道三駅前楽市」、協賛事業として岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会による「柳ぶら楽市スペシャル」、美殿町商店街振興組合による「美殿町春祭」など様々な行事が開催され、岐阜まつり宵宮実行委員会（注3）の「岐阜まつり宵宮」も、ここに名を連ねている（注3）。道三まつりの目的は、

道三まつり実行委員会規約第二条で「実行委員会は、商業、農業、観光、物産等の振興及び中心市街地を含めた地域の活性化を図り、並びに岐阜市を宣伝し、及び市民参加によるにぎわいを創出するために、岐阜まつりを共に盛り上げるイベントとして道三まつりを実施することを目的とする。」と定めているように、商業、観光振興を第一とし、岐阜まつりを共に盛り上げる協賛イベントの位置づけである。



写真 9-18 神輿パレードにおける造り神輿（令和5年4月1日）

イベントと都市祭礼の違いについて、和崎は祭りには人々の共通理解となる核や儀礼がある一方、イベントには儀礼的、宗教的な核を備えていないとする。この視点を参考に改めて道三まつりの諸行事をみると、岐阜まつりとの接点として、岐阜まつり神輿パレードにおける三社合同祭典が見いだせる。パレード自体はNPO法人ぎふ睦が運営し、参加は子供会・会社・グループ、サークルなど自由であり、神輿も本神輿、造



り神輿を問わない開放的なものである。本来、神輿は祭神を遷し氏子地域を巡行する移動式の神座であるが、参加する神輿は神社御札を納めない神輿が多数あるなど、全ての神輿が等しく宗教性を有しているのではなく、造り神輿も多い(写真9-18)。また、参加する神輿は年により異なり、一定ではない(表9-11)。この神輿パレード開催中、金神社に渡御した伊奈波神社の神輿が、会場の「みこし広場」へ渡御し、金神社、檀森神社の神輿とともに観衆に対して金神社神職による修祓、続いて伊奈波神社巫女による神楽を舞うのが三社合同祭典である(巻頭写真2)。この祭典が行われることにより、観衆は三社の祭礼との関連性、すなわち宗教的な核の存在を明確に認知することとなる。そしてパレードに参加した神輿と、それを見物に集まった多数の観衆に対して修祓と神楽を行うことで、会場はイベントの空間から、岐阜まつりの祝祭の場へ転換がなされているとみられる。なお、この三社合同祭典は平成二十年(二〇〇八)に形が整ったもので、それ以前は伊奈波神社の神輿については金神社と檀森神社への渡御であった。つまり、岐阜まつりに協賛した道三まつりのイベントである岐阜まつり神輿パレードは、三社合同祭典の形式を整えることで、岐阜まつりそのものへ包摂されたと考えられる。

このように商業イベントが祭礼と連携して開催されることも、都市祭礼では珍しいことではない。一例として国指定無形民俗文化財でユネスコの無形文化遺産に「川越氷川祭の山車行事」として登録されている、埼玉県川越市の「川越まつり」では、地域の経済力低下により明治時代後期以降衰退していた山車奉曳を、昭和二十三年(一九四八)氷川神社例祭と同日に開催した商工祭での奉曳を契機とし、以後「川越まつり」として毎年開催するようになり、令和六年には延べ七十三万八千人にもぼる来場者数を数えている(注4)。

(四) 岐阜まつりの外延

以上みてきたように、道三まつりは宗教的にも空間的にも岐阜まつりの周縁に位置するが、さらに四月第一土・日曜日に「岐阜まつり」と称して例祭や神輿を出す地域が岐阜市内に多数存在し、当日には其処彼処の社前参道に祭礼の幟がはためく。その経緯は第二章第三節(三)で述べられているように、明治七年(一八七四)に金神社を初めとする上加納村の諸社が例祭日を伊奈波神社と同じ四月五日とし、同二十二年(一八八九)に旧岐阜町と上加納村の一部を併せて岐阜市制を施行後、町村合併により当該地域の神社例祭日を伊奈波神社に合わせた例が多く、その後平成七年(一九九五)に四月第一土・日曜日に変更して現在にいたる。但し、江戸時代加納藩城下町であり、加納天満宮を信奉する加納地区など例外もある。これらは各地域の神社で行われる祭礼と神輿であり、伊奈波神社を核とする岐阜まつりとは別個のものである。つまりここでいう「岐阜まつり」とは、「岐阜のまつりの日」の祭礼、もしくは「岐阜まつりの日」の祭礼という意ととることができるとする。

このように期日の点からみれば、岐阜市域における四月第一土・日曜日は、伊奈波神社と金神社、檀森神社の祭儀に、岐阜まつりの宵宮、岐阜まつり神輿パレードがもたらす祝祭が加わり、さらに地域における諸社の例祭と神輿練りなど多様な宗教的核の祭儀によって、相乗的に非日常的な空間を形成し、それが岐阜まつりの外延として存在しているようである。

なお、大正時代には長良の鵜飼屋、真福寺の本神輿、太田、八代、天神、西浦の花神輿が、連合渡御として伊奈波神社や金神社へ宮入をしていた。また、長良高見の神輿も昭和初期には長良の連合渡御に参加し、更には禁止されていた柳ヶ瀬通りを練り歩き、金津遊郭門前で大騒ぎをしたという(注5)。長良村の岐阜市合併は昭和七年(一九三二)であるが、それ以前から連合渡御が行われていた。このような事例から、岐阜まつりと別地域の神輿でも、岐阜まつりが形成する祝祭の場へ参画することで岐阜まつりが包摂するプロセスが見い

だされる。これは祭礼日の統一、すなわち祝祭の共時性があるからこそ可能なものであろう。しかしながら、現在これらの地域における「岐阜まつり」の多くは、子ども神輿で地域を巡る行事が中心となり、神輿に対する関心の低下と子どもの減少、それに加え新型ウィルス感染症による行事中止が影響し、退潮の傾向が強い（注6）。その一部は岐阜まつり神輿パレードに糾合しているといわれるが、地域の祭礼が、岐阜まつりそのものに包摂されているとはいえないのである。

（五）祭りを示す形象と変化

以上、現在の岐阜まつりを象徴する山車と神輿を中心にみてきたが、その数は神輿が圧倒している。しかし、江戸時代後半の「岐阜因幡御神事」〔四一頁・資料2-5〕では山車二十七台に対して、神輿二基（下矢島町・布屋町）、榊山一台（下矢島町）が描かれていることをはじめ、その変遷は第二章第二節から第三節にかけて詳しい。それに基づけば、明治時代まで山車の数は神輿に対して優勢であったが、明治二十四年（一八九一）の濃尾震災で多くが被災して失われると、各町内では造り物を載せた飾り山車や俄などの奉芸が盛んになる。さらに昭和二十年（一九四五）の岐阜空襲により岐阜市中心部が焦土と化したのが、翌年には岐阜まつりが再開され、同二十四年には造り神輿四十〜五十基が社頭に並び、翌年には山車の奉曳（清影車・踊車）が再開されている。つまり、岐阜まつりにおける各町内の奉芸は、時代や社会情勢によりその種類や数が変化しており、必ずしも山車や神輿に限定したものではない。

一方、全国の伝統的な祭りでは、山車や屋台などを長く継承していく例が多い。その代表例は、十四世紀末にはほぼ完成し、四種類の類型が揃ったとされる京都祇園祭の山鉦であろう。国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「大垣祭の軸行事」として登録され、十三台の曳山が奉曳される岐阜県大垣

市の大垣祭の軸は、十七世紀後半からの歴史を持つが、濃尾震災や戦災により多くの軸が失われた。しかし、その度に時間をかけてでも軸を新調や再建している。このように軸は大垣祭を象徴する伝統的な形象として広く認識され、各町はそれを維持し、滅失した時は再生することで祭礼の持続が図られている。

また、継承の過程で形状が変化する例もある。国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産登録の祭礼では、「角館祭りのやま行事」として登録されている秋田県仙北市の角館祭りのヤマや、「土崎神明社祭の曳山行事」として登録の秋田市土崎神明社祭のヤマは、かつては大勢で担ぐ「担ぎ山」であったものが、車輪をつけた曳山や、固定化した置山へ変化した。「魚津のタテモン行事」として登録された富山県魚津市諏訪神社例祭で、各町内が出す山型に提灯を飾った造り物のタテモンは、提灯の数が明治時代は二十五個程度であったものが、大正時代には五十個程度、昭和時代以降は九十個程度と大型化した。このように造り物が大型化することは、観る者の印象をより強化するものであり、類例の多い変化の方向性の一つであるが、伝統的な形象のイメージを外れるものではない。

いずれにしても、山車や屋台、造り物など、祭礼における形象は、それを担うコミュニティにとって結集の象徴であり、対外的には祭礼の形象として機能していると思われる。

一方、岐阜まつり同様、各地の祭礼において主要な奉芸が時代により異なる例もある。江戸三大祭りの一つに数えられ、二百基以上の神輿が宮入すること知られる東京神田明神の神田祭は、江戸時代の十九世紀中頃には二基の神輿と三十六台前後の山車、それに踊り屋台や曳き物、仮装行列などの「附け祭」が加わった行列で、江戸城曲輪内へ練り込んでいた。明治時代も引き続き山車を主体とした行列が行われていたが、明治十七年（一八八四）の台風により多くの山車が被災した。さらに市中の電線架設が障害となり背の高い山車の奉曳



に支障をきたすなどにより、次第に山車は各町内に備え付けるのみとなり、大正時代には代わって神輿渡御が行われるようになった。神田祭を分析した秋野淳一は『神田祭の都市祝祭論』〔岩田書院 平成三十年〕において、「都市祝祭と町内の祭りは、祭礼の象徴を介して、維持・拡大しているといえるのではなからうか。そうした意味では、神輿や山車といった祭礼の象徴の存在が神田祭の盛衰に重要な役割を果たしている。だからこそ、たとえ観念的であつても町内共同の危機においては、祭礼の象徴が新たに誕生したり、復活したりするのである。」「五四四頁」と指摘している。つまり、都市祭礼はその担い手が結集する象徴の変化により維持されてきた側面を有すると考えられる。

同様の例は、国指定無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産に「八戸三社大祭の山車行事」として登録されている、青森県八戸市の八戸三社大祭でも伺い知ることかできる。八戸市は青森県の南東部、岩手県と県境を接する人口約二十二万人〔令和五年三月三十一日現在住民基本台帳人口〕の中核市で、三社大祭は竈神社、長者山新羅神社、神明宮の合同例祭に合わせて行われる行事である。その始まりは享保六年（一七三二）に始まる八戸藩鎮護の法霊社の神輿渡御といわれ、当時は神輿の前後に幡、箆鉦、山伏や獅子権現が続く程度であり、その後町人による人形を乗せた「人形出し」が加わるも、明治時代に入ると衰退し、代わって明治二十年（一八八七）から現在のような山車が曳き出されるようになったという。現在は「お通り」「お還り」と呼ぶ神幸行列に「附祭」として二十七台の山車の奉曳と、様々な出し物が加わる。山車は毎年各山車組が新たな題材で新造する造り物の山車で、祭礼が終わると解体する。山車組には、組の町内だけでなく、親類縁者、山車組のない町内、職場や友人などが広く参加している。また、出し物は山伏による「法霊神楽」、「虎舞」、「大神楽」のほか、平成時代には伝統芸能の「駒踊」「笹の葉踊」が復活して加わり、同じく途絶えていた芸妓の踊り屋台である「華屋台」も加わるようになった。

八戸三社大祭の場合、山車自体を毎年作り変えることで町内をはじめ多数の担い手が結集し、「附祭」の芸能復活も新たな担い手の参画をもたらしている点、先の神田祭同様、都市祭礼として変化による維持が認められる。また、毎年新造する造り物の山車は、既に百四十年近く続けられており、このように変化することが、祭礼の精神として受け継がれていると考えて良いのではなからうか。

（六）岐阜まつりの変化と意義

改めて岐阜まつりの奉芸の変遷をみると、台風という自然災害が端緒で山車主体から神輿主体へ形象が変化した神田祭同様、岐阜まつりは明治二十四年の濃尾震災によつて人形（からくり）山車や踊り山車から、造り物と俄による、「にわか山車」主体に形象が変化している。神田祭も岐阜まつりも、この変化によつて祭礼が継続された。昭和五十二年（一九七七）に刊行された『岐阜市史 通史編民俗』では、この「にわか山車」について、古老の談話をもとに次のように記している。

にわか山車は、からくり山車には見られない「つくり」と、町民が創作した「にわか」を演ずることで、祭りに花を添えてきた。またにわか山車を出す町内には、つくり山車とは違った町民意識が感じられた。

東材木町では、祭礼に山車を出すことが決まると、町総代が町内の野村屋に依頼し、部屋を借り、祭りの準備にとりかかる。

会所に集まった人々は、山車のつくりを何にするかを相談した。その結果「かぶと」或いは「桃太郎」などに決まると、早速青竹を準備し、町民の手で製作にかかった。紙を貼つて、色を塗り仕上げるまでには、たつぷり一カ月半は要した。この間、どの家も毎晩一名は会所に詰め協力し合つて、仕事を進めた。自分らの企画を、自分らの手で実現していく此の仕事は、格別に楽しく、熱も一段と入った。その結果、つくりは、町民の愛情のこもったものとして完成さ

れていた。

会所ではこの仕事と並行して、「にわか」の練習が行われた。にわかとはにわか芝居の意味で、寸劇の類に入る芸能であった。にわかには、からくり山車の人形の踊りに相当するものであり、山車が練つていく順路に従って、方々で山車の先綱で大きな輪を作り、その範囲を舞台として、演ずるものであった。

従って、にわかには山車の立寄る場所にふさわしい内容が考えられた。日頃、三味線の練習、狂俳の会を通して、深いつながりのある町内の芸達者が、にわか創作にあたつた。練習も相互の考えを出し合い、他町内の応援も受けたりして、賑やかな中にも、厳しさが漂っていた。祭りは自分らの芸を披露する場であるという意識が、町民の団結を強いものにしていたし、真剣な取組をさせていた。

祭りの山車は、決まって金津廓へ行った。東材木町のにわか山車でも金津廓にふさわしい内容の種目を用意した。(下略) 林基吉談「七六五〜七頁」

この談話では、にわか山車が明確にコミュニティにとつて結集の象徴であることを述べるとともに、他の神輿同様金津廓にまで練り込むなど、対外的にも岐阜まつりの形象として認識されていることがわかる。また、「つくり」や「にわか」は毎回新しく考案し、常に変化するものであり、それがまた町民の団結を強めるとの記述は、担い手の結集する象徴の変化(作り変え)により維持されてきた側面を如実に示している。これは先に紹介した八戸三社大祭の山車や神田祭の「附け祭」とも共通するものである。

岐阜まつりにおける山車は、昭和三十七年(一九六二)に安宅車、同四十一年頃に若戎車、清影車も同四十二年頃にはそれぞれ伊奈波神社に奉納され、安宅車は金華地区、清影車は京町地区の各町内が輪番制で奉曳し、若戎車は明德・本郷地区の岐阜若戎車奉曳会が奉曳を担うようになった「五八頁参照」。このような輪番制並びに地区の団体が一括して請け負うことは、従来人形(からく

り)山車を持たない町内の奉曳が可能となり、負担も軽減した半面、その山車を持たなかった町内が独自に出していたにわか山車が消滅してしまい、岐阜まつりの衰退の一因となったようである。

それに代わって変化を担ったのが、先に述べた昭和四十八年の「岐阜まつりを共に盛り上げるイベント」として始まった道三まつりであり、平成七年に宵宮の賑わいを取り戻すべく結成された宵宮実行委員会主催による宵宮行事だったといえよう。

このように、祭りの形象の観点から、岐阜まつりにおける変化は、確かな記録の残る濃尾震災以来、百三十年以上の歴史がある。また、奉芸の地区の変化からみれば、江戸時代の旧岐阜町に加え、明治五年に小熊村に踊り山車に加わっていることをみれば「六四頁・表2-1」、百五十年を超えるものである。これは先に触れた八戸三社大祭と同様、変化することが祭礼の精神として受け継がれているものであり、それによって、現在の賑わいが維持されていると評価することができよう。

(七) 岐阜まつりの特徴

では、岐阜まつりは何故このような都市祭礼として成立したのであろうか。この点については多くの論があると思われるが、ここでは以下二点をあげておく。一つは、江戸時代、岐阜町が商工業・水運の町であり、資力を有し、各地との交流が盛んであるとともに、尾張藩領の辺縁地域のため、強い集権力が働かず、住民は開放的な気質であったと想像されることである。明治八年(一八七五)の岐阜県による調査で、岐阜町住民について「其俗高尚ニシテ狭固。人心最軽薄、市中大半商ヲ業トス。即勤惰相半ス。」(注7)と評しているのはその一例であろう。

第二に、第二章第二節(三)3に述べられているように、江戸時代から明治



時代にかけて、伊奈波神社周辺は見世物や興行が行われる歓楽地になっていたことである。そのため不特定多数の者が来集し、常時、非日常的な場を形成していた。そこに立地する伊奈波神社を核とした祭礼であるため、そのイメージは少なからず反映され、祭儀と同時に祝祭の要素が多分に意識されたと推測される。「岐阜名所図会」に載せる「伊奈波神社例祭」の図「四一頁・資料2-4」には、各町の山車が現在同様参道鳥居前の坂を登る様子を描いているが、そこに夥しい群衆が見物に押し寄せる様や、添えられた「人の出や 花にうきたつ砂ほこり」の句からは、既に江戸時代からこの祭りが祝祭の要素を十分に備えていたことを示すものであろう。

現在の岐阜まつりは、このような地域の歴史的背景をもとに、宗教行事、伝統行事、観光行事が重層的に併存し、祭儀と祝祭が相乗的に現出するとともに、祭礼の担い手は従来の価値観と外部の視線をとりこんだ新たな価値観を持つ相互関係のうえに成り立つ開放性を有し、伝統的な祭儀を伝える一方、その形象、奉芸、地区等は変化していく、都市祭礼の特徴をよく備えたものである。そして、その変化は、確かな記録が残る近代以降、少なくとも百五十年を超え、受け継がれてきたものである。

(注)

(注1) 『岐阜新聞』令和七年一月四日記事

(注2) 『岐阜新聞』令和六年四月五日記事

(注3) 岐阜のまつりHP（道三まつり実行委員会・ぎふ信長まつり実行委員会運営）

<https://gifuomatsuri.jp/>

(注4) 「令和6年度川越まつり来場者数」川越まつり公式サイト「お知らせ」令和六年十月二十八日掲載データ <https://www.kawagoematsuri.jp/news/20241028.html>

(注5) 高見青年団OB会刊『高見のみこし』長良のみこし』平成三年 私家版

(注6) 令和五年、岐阜市内の全五十地区の自治会連合会に対して実施した「みこしが出る祭りに関するアンケート」では、山車を出す四地区（金華・京町・明德・徹明）と大人神輿を出す祭りを実施していない八地区を除く三十八自治会連合会中、子ども神輿の記載があるのは二十五自治会、そのうち「岐阜まつり」（四月第一土・日曜日）に子ども神輿を出していたのは十三自治会（華陽、日野、長良、鷺山、常盤、長森西、岩野田、茜部、西郷、七郷、岩、三輪南、藍川）であった。このうち、日野、長良、岩は令和五年度時点で中止または廃止。また、この日大人神輿を出していることが確認できるのは五自治会（華陽、長良西、鷺山、長森南の林北町自治会、西郷）であった。「表9-2参照」

(注7) 岐阜県立図書館編『美濃民俗誌稿 関口議官巡察復命書』昭和五十一年刊 一一頁

(参考文献)

伊藤泰雄著『神輿大好き』平成二十七年 私家版

植木行宣監修『山・鉾・屋台の祭り研究事典』令和三年 思文閣出版

第三節 岐阜まつりの特徴と地域性

(一) 重なる変化

岐阜まつりをひとことで説明しようとするのはむずかしいが、その特徴をあえていうなら、かたちが一定していないことにある。もちろん、今の世の中にあって、祭礼行事の中身や支え方に変容が起こるのは仕方がないが、ここでのいうのはそういった変化ではない。例えば山車の町内巡行にしても、山車三者がまったく同じ行程で巡行するなどということは、非常に低い確率である。囃し方を子供にやらせるといっても、半数の子どもは昨年と同じでは

ない。ある子どもが太鼓を担当した場合、次に担当するときは「子ども」でなくなっていることだってめずらしいことではない。こうしたことは多くの場合、行事の統一性がなくなり、行事の意義が忘れられ、最悪の事態には行事の廃絶すらも起こりうる。

しかしその反面で、このまつりは随所で変化もさせられた。

最も大きいのは、祭礼の期日である。明治六年（一八七三）に新暦が採用され、伊奈波神社の祭礼日は三月三日が四月五日に改められた。そしてこの改定に合わせて、岐阜市内の各神社も祭礼日を四月五日へと改めるようになり、岐阜市全体の祭りを総称して「岐阜祭り」という。さらにそれは昭和四十年代に入って、期日は土日曜日に合わせておこなわれるようになった（ただし伊奈波神社は、例祭を四月五日におこなうことを守っている）。また昭和四十八年（一九七三）から、神社とは無関係の商工関係者が作った「道三まつり」も加わるようになり、次第に祭りは神社だけのものではなくなってきた。今では、岐阜市の一番のメインストリートが神輿パレードをする中、一定期間を伊奈波神社の祭礼（神幸祭の一部）に費やすという、他所者から見れば「破天荒」と思われることまで変化させた。

神輿でいえば、宵宮には、市の重要有形民俗文化財に指定された木造町の町神輿三基が奉納される。この神輿は宵宮以外の時でも、地元界隈で見ることができる。一方、四月第一土曜の昼間の、道三まつりの神輿パレードではなくさんの神輿が出て、うち何基かは宵宮にも出てくる。神輿は伝統的なものもあれば新出来のものもあり、それらが一体となって宵宮の神輿行列がおこなわれる。これも、昔では考えられなかったことである。

山車の曳行であっても囃子であっても同様で、要するに「岐阜まつりの様子について語れ」といわれても、それは「〇〇年頃の」という限定詞がつかないと無理である。それほどまでに、岐阜まつりの内容は変化している。

（二）岐阜まつりを守ったもの

伊奈波神社としては、中には同調しがたいような変化もあったことであろう。しかしながら、一方では祭礼の期日や行事の開催方法を改めてゆきながらも、他方では確固として守り抜いている、例えば例祭の期日とか中身だとか、そういう部分もある。つまり、伊奈波神社側の大きな理解によって、岐阜まつりは、市民との間の距離を縮めてきた感がある。

また、岐阜まつりを存続させようとしているのは、地域住民の意識の高さでもある。たとえ自分たちが辛い目を見ようとも、たとえ子どもたちの自由が制限されることになっても、この囃子を残すことが大切だと思うからこそ、囃子の行事を続けられた。ただしそれは昔のとおりではなく、許される範囲の中で変化もさせてきた。だからこそ、まつりが続いてきた。

からくり人形も町神輿も、「あるだけで動かない」では、文化が終焉してしまふ。それを嫌うからこそ復活させた。ゆえに、現状がある。

神社側と住民側、双方の努力によって、岐阜まつりは存続してきたといえる。

（三）岐阜まつりの民俗学的意義

岐阜まつりは、岐阜という中規模都市にある伊奈波神社という大規模神社が、神社の伝統神事や行事を、神社を取り巻く人々の文化の中で、どのように位置づけてゆくかを考える上で、非常に重要な事例でもある。中世末期、たとえば斎藤道三や織田信長らによって作り上げられた岐阜の城下町が、近世都市として形成されてゆく中で、伊奈波神社は神道信仰の要であったことはいうまでもないが、それ以外にも「氏神・伊奈波さん」として都市民、いわゆる「町衆」の間でも親しまれてきた。結果、伊奈波神社の例祭の日には、神社本体の神事のほかに、伊奈波神社をめぐる「町衆」の間で、さまざまな行事も生まれている。それらのひとつが、山車奉曳であり、からくりや狂



言奉芸であり、踊り奉納であり、神輿奉納などであった。

「町衆」の行事の中には、今も引き継がれているものもある。ただ、現在の形にいたるまでにはさまざまな紆余曲折を経ている。支える団体も町内会や子供会、〇〇保存会、あるいは商工会、PTAなど、昔とは違っている。しかし、その変容は表面的なもので、根底にある意識は「氏神・伊奈波さん」への信仰心であり、それを支えるのは地域のコミュニティである、ということとは変わりが無い。

振り返ってみれば、神社と「町衆」との親密な関係は、伊奈波神社の祭礼が衰退する前、それこそ明治地震以前や江戸末期に、からくりや神輿、狂言、にわかなどで賑わっていた時代にもあったと想像される。だとすれば、今日の岐阜まつりは、目に見える表層的な部分は変わっても、本質的には変わらない、いわば時代を超えて蘇った昔ながらの祭礼形態といえるかもしれない。

その変容の歴史や現状は記録に止め、保存に努めるべきである。歴史資料として、また有形資料としての価値は高い。それ以上に、過去の伝統から現代までの変容を明かすために、岐阜まつりは無形民俗文化財としての価値があるといえる。

	29 30 31	R2 3 4 5 6 7	備 考 (年号のない数字は回)
	45 46 47	48 49 50 51 52 53	
			伊奈波神社所有の神輿。
			片田神社 明治 38 年に三里村六条出身の石樽朴次郎が日露戦争戦勝記念製作。
			昭和 63 年から参加。平成 3 年に新調。 33・34 岐阜市農業協同組合、42 ～ぎふ農業協同組合。
			29・31 ～中部電力㈱。
			44 ～ OKB 大垣共立銀行。
			平成元年より参加。
			25 ～岐阜市職員、30 ～32 岐阜市役所有志、33 ～岐阜市役所、 40 ～岐阜市職員みこしパレード実行委員会。
			平成 7 年結成。29 岐阜心女、30 ～女神輿 岐阜心女、33 女神輿 岐阜心女・子心女、 34 女神輿 心女 大人神輿・子供神輿、35 ～女神輿 岐阜心女、 42 ～女神輿 岐阜心女・子供みこし子心女。 昭和 27 年 福井光一(木造町) 作。
			昭和 51 年から参加。
			市川工務店からいただいた神輿。 40 ～(公社)岐阜青年会議所、51(一社)岐阜青年会議所。
			51 ㈱十六フィナンシャルグループ。
			昭和 60 年から参加。美園町の唐箕屋本店で調製。参加しなくなった後、神輿を廃棄。
			平成の御大典記念で調製。平成 3 年より参加。
			昭和 63 年調整。31・32・34 サムソン・ビューティチェーン(協)、 33 サムソン・ビューティチェーン、35 サムソン ビューティチェーン、 38 ㈱サムソン、40 ～サムソンビューティチェーン協同組合。
			昭和 58 年に参加している。
			29 ～㈱電算システム。
			40 ～医療法人社団 誠広会 平野総合病院。
			25 岐阜我が街の会、26 ぎふ我が街の会、27 ～岐阜我が街の会。
			全 3 回参加。
			パレード開始以来毎年参加していた。
			昭和の御大典記念に作成。平成 8 年に神明神社より譲り受ける。 伊奈波神社の紹介により現在は加納天満宮に保管。
			32 ～金神社岐阜祭奉賛会 岐阜睦。
			29 ～岐阜シニアリーダークラブ。
			31 ～岐阜市立岐阜商業高等学校。
			29 ～岐阜ハイジュニアリーダークラブ。
			31 弥生町ママさんの会、32 ～岐阜柳ヶ瀬弥生町ママさん会、 35 ～弥生町ママさん会。
			32 ボーイスカウト岐阜第 2 団 A 組、B 組。
			30 NHK 岐阜放送局。
			32 ～明徳校区子ども会育成会、35 ～岐阜市明徳子ども会。

表 9-1 (1) 道三まつり 神輿パレード参加団体の変遷 (1)

年	H8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
開催回	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
大日本土木㈱																						
㈱岐阜銀行																						
立正佼成会岐阜教会																						
JA ぎふ																						
岐阜商工信用組合																						
中部電力㈱岐阜営業所																						
㈱大垣共立銀行																						
岐阜新聞社・岐阜放送グループ																						
岐阜市消防本部																						
心女																						
外国人みこし																						
(社)岐阜青年会議所																						
㈱十六銀行																						
㈱高島屋岐阜店																						
松阪祇園まつり三社みこし																						
岐阜信用金庫																						
㈱サムソン																						
岐阜バス																						
岐阜流通センター(協)																						
電算システム																						
平野総合病院																						
わが街の会																						
㈱ダスキン岐阜支社																						
岐阜市青少年海外交流協会																						
日の丸興業																						
㈱河吾グループ																						
岐阜睦																						
岐阜シニアリーダー																						
市立岐阜商業高等学校																						
岐阜ハイジュニアリーダー																						
日本将心会																						
GIFU ストリートカーニバル																						
弥生町商店街振興組合ママさんの会																						
ボーイスカウト岐阜第2団																						
NHK 岐阜支局																						
ボーイスカウト岐阜第6団																						
明徳子ども会																						
ボーイスカウト岐阜北地区																						

[illegible]

表 9-1 (2) 道三まつり 神輿パレード参加団体の変遷 (2)

年	H8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
開催回	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
徹明 5 地区親睦会																						
京町第 1 地区子どもみこし																						
京町校区第 2 地区子どもみこし																						
早田子ども会																						
岐阜市内郵便局																						
神輿愛好会 蕎 (まっしぐら)																						
徹明総合スポーツ少年団 野球部																						
徹明小学校 バトミントン部																						
ぎふサン SUN 子ども劇場協議会																						
加納天満宮「神加勢」																						
檀森神社子どもみこし																						
華陽子ども会連合																						
岐阜祭粋会																						
ぎふ青年みこし																						
長良西みこしかつごまい会																						
日ノ出町子ども会																						
明郷地域ジュニアリーダー MJI																						
明德地域子ども会育成会西組、東組																						
岐阜市身体障害者福祉協会青壮部																						
ぎふ長良川勝手おどり実行委員会																						
明德・本郷連合子ども会																						
宮島薬品㈱																						
三里六條神社 神輿会 梨割会																						
ペルフォート・百合姿合同ビューティーみこし隊																						
響 白山子ども会																						
シーシーエヌ																						
MJI 岐阜																						
やななみこし																						
木ノ本少年消防クラブ																						
阿多岐神輿会																						
木之本あすなろ会																						
ぎふ音楽クラブ																						
白山神輿会																						
一般社団法人 岐阜北法人会 女性部																						
日本南京玉すだれ協会																						
(明德山車 若戎車)																						

凡例

各年の道三まつりパンフレットに掲載している団体名を集計した。当日の参加は異なる場合がある。

花…木造町花神輿

48・49 は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止。

1～23・37 は不明。

表9-2 (1) 岐阜市内のみこしが出るまつり (1)

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
1 金華	M22	岐阜まつり	伊奈波神社	4月第一土曜	○	○	○		○	山車	S20～
2 京町	M22	岐阜まつり	伊奈波神社	4月第一土曜	○		○		○	山車	S20～
3 明徳	M22	岐阜まつり	樺森神社周辺・神田町通	4月第一土曜	○		○				～江戸
			伊奈波神社	4月第一土曜	○					山車	～江戸
4 徹明	M22	岐阜まつり		4月第一土曜	×		○				
5 白山	M22	無し									
6 梅林	M22	無し									
7 本郷	M22	不明	鍛神社	不明	×						不明
		不明	伊奈波神社	不明	×						不明
		不明	稲荷社	不明	×						不明
		不明	観音	不明	×						不明
8 華陽	M22	住吉神社例大祭 岐阜まつり	住吉神社ほか 華陽地区内	10月第一日曜 4月第一土曜	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○		餅まき等	不明 S20～
9 木之本	M22	無し								※こどもみこしのみ	
10 本荘	S6～S10	無し									
11 日野	S6～S10	岐阜まつり	日野本郷地区(日野東1～5丁目)		×		○				不明
12 長良	S6～S10	不明		4月第一土曜	×		○				S20～
		天神神社祭礼	長良天神神社	4月5日	×						不明
13 長良西	S6～S10	岐阜まつり	神田町通り	4月第一土曜	○						M～S20
14 長良東	S6～S10	不明	護国神社	不明	×						不明
		不明	新屋敷地区	不明	×						不明
15 島	S6～S10	不明	近島地区	4月第一土曜	×						不明

	校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
							例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
16	早田	S6～S10	第■回春祭り	津島神社ほか	4月第一土曜	○	○	○				M～S20
17	城西	S6～S10	不明	不明	不明	×						不明
18	三里	S6～S10	岐阜まつり	片田神社	4月第一土日曜	×						S20～
19	鷺山	S6～S10	岐阜道三まつり	北野神社	4月第一土日曜	○	○					不明・無回答
			岐阜道三まつり	無回答	4月第一土日曜	○	○					S20～
			正木こし祭り	白山神社	4月第一土日曜	○		○				不明・無回答
			岐阜道三まつり	秋葉神社	4月第一土日曜	×		○				S20～
20	加納東	S15	加納天神まつり	加納天満宮	10月第三土日曜	○	○	○	○	○	山車、稚児行列	S20～
			玉性院 節分つり込み祭	玉性院	2月3日	○	○	○		○	豆まき	S20～
21	加納西	S15	加納天神まつり	加納天満宮	10月第三土日曜	○	○	○	○	○	山車、稚児行列	S20～
22	則武	S15	則武祭り	日吉神社	11月11日	○	○	○				S20～
			岐阜まつり	下坂田寺	不明	×	○	○				不明
23	常磐	S15	岐阜まつり	上坂田寺	不明		○	○				不明
			岐阜まつり	上土居東西	不明		○	○				不明
24	長森南	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	○	○	○		○		～江戸
25	長森北	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	○	○	○		○		～江戸
26	長森西	S15	岐阜まつり	吉野神社ほか(林北町自治会)	4月第一土日曜	○		○				不明
27	長森東	S15	手力雄神社火祭り	手力雄神社	4月第二土曜	×	○	○		○		～江戸
28	木田	S15	無し									
29	岩野田	S24～S25	岐阜まつり	諏訪神社	4月第一日曜	○	○	○				M～S20
			岐阜まつり	白山神社	4月第一日曜		○	○				M～S20
30	岩野田北	S24～S25	無し									

表9-2 (2) 岐阜市内のみこしが出るまつり (2)

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
31 黒野	S24～S25	不明	多賀神社	4月第一土曜	×						不明
32 方県	S24～S25	無し									
33 茜部	S24～S25	岐阜まつり	茜部神社	不明	×		○			今はこどもみこしのみ	S20～
		岐阜まつり	比奈守神社	不明	×		○			今はこどもみこしのみ	S20～
34 鶉	S24～S25	岐阜まつり	不明	4月第一土曜	×						不明
35 西郷	S24～S25	岐阜まつり	各地区		○		○				不明
36 七郷	S24～S25	岐阜まつり	津島神社				○				不明
37 市橋	S24～S25	不明	藪田神社		×						S20～
38 岩	S24～S25	岐阜まつり	伊波乃西神社ほか		×	○	○	○		餅まき	不明・無回答
		岐阜まつり	六所神社ほか		×	○					M～S20
39 鏡島	S30～S44		神明神社	4月第一土曜	×						S20～
40 厚見	S30～S44	神明神社春の例祭	神明神社	4月第一日曜	○	○	○				不明
		領下神輿巡行	領下地区		○	○					不明
			西領下地区		×						
			上川手地区		○	○					不明
41 日置江	S30～S44	日置江まつり	日置江神社ほか	4月5日		○	○				M～S20
		日置江まつり	白山神社	4月5日		○	○				M～S20
		日置江まつり	神明神社	4月5日		○	○				M～S20
42 芥見	S30～S44	八幡神社大祭	八幡神社	4月第二日曜		○	○	○		餅まき	～江戸
		諏訪神社祭り	諏訪神社	4月第一日曜		○	○			餅まき	S20～
43 芥見東	S30～S44	無し								※こどもみこしのみ	
44 芥見南	S30～S44	無し								※こどもみこしのみ	

校区名	岐阜市 編入時期	①まつり名	②神社名等会場	③-1期日	③-2 現在	④大人みこし以外の祭りの内容					⑤起源
						例祭	こどもみこし	神楽・舞	出典・屋台	その他	
45 藍川	S30～S44	岐阜まつり	加野地区		×		○				S20～
46 合渡	S30～S44	祭いこまい中山道河渡宿	馬頭観世音菩薩観音堂	10月最終日曜	○						S20～
47 三輪南	S30～S44	岐阜まつり	日枝神社ほか		×	○	○				不明・無回答
	S30～S44	岐阜まつり	三嶽神社		×	○	○				S20～
48 三輪北	S30～S44	岐阜まつり	白山神社		×	○					S20～
	S30～S44	三輪祭り	三輪神社	4月第一土曜	○	○		○			～江戸
49 網代	S30～S44		熊野神社		×						
	S30～S44		春日神社		×						
50 柳津町	H18		高桑地区		×						

凡例

1 このアンケートは、各地区の自治会連合会に依頼して令和5年度に実施したものである。（一部開取りあり）

2 設問は以下のとおり。

あなただの地域の「みこしが出る祭り」についてお聞かせください。 ※大人がみこしを担ぐ祭りを対象

①祭りの名称 ②会場名・住所 ③開催日と現在の開催状況

④大人みこし以外の祭りの対象（例祭/こどもみこし/神楽・屋台などの踊り/出店・屋台/その他）

⑤祭りの起源（江戸時代以前/明治～昭和20年/昭和20年以降/不明）

岐阜まつり総合調査報告書

発行

岐阜市

令和八年三月

編集

岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課
〒五〇〇―八七〇一 岐阜市司町四〇番地一
電話 〇五八―二六五―四一四一